審査内容の結果の要旨

吉田隆嘉

本研究は、外来患者による大規模病院への過度な集中緩和の条件を探ることを目的に、都市近郊の地域コミュニティー内における診療所に関する情報の交換と医療機関の選択との関係について解明を試みたものである。横浜市青葉区・緑区の住民 900 人を対象に、地域の診療所に関するパーソナル情報の伝達や診療所と大規模病院の選択行動などについて質問紙調査を実施し、以下の結果を得ている。

1．地域の診療所に関するパーソナル情報の受信頻度は、居住歴が長い住民ほど概ね高い傾向が認められた。このことから、地域コミュニティー内における社会的絆が強いほど、診療所に関するパーソナル情報の伝達が活発になる可能性が指摘できた。また、男性よりも女性の方が肯定的パーソナル情報の送受信の頻度が概ね高い傾向にあることが認められた。

2．診療所に関するパーソナル情報を送受信する頻度については、肯定的情報が否定的情報を上回る傾向が認められた。このことから、住民は診療所に関して否定的情報を送信することで、自らの人格的評価の低下や相手の気分を損ねることを懸念している可能性が指摘できた。

3．診療所に関するパーソナル情報を参考にする程度については、否定的情報に関する場合は肯定的情報に関する場合よりも有意に高い値を示した。このことから、個人的な人間関係によって得られた情報を、優良診療所の選別よりも不良診療所の回避により重きを成して利用しているものと考えられた。

4．診療所についてのパーソナル情報が伝達される場合、伝えられる評価の程度の強さについては、肯定的情報に関する場合に比べ否定的情報の関する場合に有意に高い値を示した。このことから、否定的評判の伝達が不満の表出手段としても用いられている可能性が推論できた。

5．ロジステック回帰分析の結果、地域の診療所に関する住民間の肯定的なパーソナル情報の送受信は、住民の心理的な大病院志向を有意に抑制す

る傾向が認められた。一方、否定的なパーソナル情報の送受信については、こうした心理的な大病院志向を抑制する傾向は認められなかった。このことから、診療所に関する肯定的なパーソナル情報が頻繁に得られれば、診療所受診に対する漠然とした不安感を払拭できるため肯定的情報の伝達は大病院志向を逓減させる効果を持つ可能性が推論できた。

6．心理的な大病院志向について認められた診療所に関する肯定的なパーソナル情報の伝達による抑制効果は、実際の受診歴を元に算出した医療機関の受診傾向については認められなかった。これは、心理的には大規模病院の受診を希望しても、実際には就労者が時間的制約から大規模病院の受診を断念するなど、心理的な大病院志向以外にも様々な因子が影響を及ぼしているものと解釈できた。

一般の商品に対する購買行動に関し評判情報の果たす役割については、これまで多くの研究がなされてきた。だが、大規模病院と診療所の選択行動に関しては、評判情報について本邦で大規模調査が行なわれた例はない。本論文は、地域における診療所に関する評判情報の送受信と患者の大病院志向との関係について着目し、両者に相関があることを、情報の非対称性に対する緩和機能の観点から実証した最初の研究であるという点で独創性が認められる。

また本論文は、地域コミュニティーにおいて住民同士が診療所に関する肯定的な評判情報を円滑に交換できるよう環境を整えるなど、コミュニケーション面での改善が過大な大病院志向の抑制に役立つ可能性を示した。大規模病院への患者の集中は、とりわけ都市近郊において近年、社会的な課題となっており、その緩和策に一つの道を開いたという点で医療政策の立案の上でも有用性がある研究だと認められる。

以上より、本論文は学位の授与に値するものと考えられる。